

シユステフアン・ヴラダー & クリスティアン・ブツダフマン

Stefan Vadar & Christian Buchmann
●指揮：ピアノ／ウィーン・カンマー・オーケストラ事務局長
取材・文：中東生



左からブッフマン、ヴラダー

■Information

ウィーン・カンマー・オーケストラ
(日程・会場・問合せ) 5月29日・静岡音楽館AOI054・251・2200、30日・福岡シンフォニーホール0570・033・337、6月1日・札幌コンサートホールKitara011・612・8696、2日・函館市民会館 0138・32・1773、3日・武蔵野市民文化会館0422・54・2011、5日・東京オペラシティ03・5774・3040、7日・新潟りゅーとびあ025・281・8000、8日・ザ・シンフォニーホール06・6453・6000(共演) 牛田智大(5月29日、6月3日以外に出演)〈曲目〉モーツァルト「ディヴェルティメント」K.136、ショパン「ピアノ協奏曲第2番」、モーツァルト「交響曲第41番(ジュピター)」※各プログラムについては別冊「コンサート・ガイド」を参照

ウィーン独特のリズムの揺れを最大の長所に

——今回のプログラムについて
ヴラダー(以下、V) 僕が選んだ曲の中から、日本側のニーズに合わせて構成してもらいました。ウィーン音楽のスペシャリストを負するウィーン・カンマー・オーケストラらしい選曲です。室内管弦楽団という形態はモーツァルトに最適ですが、今回は彼の最後の作品《ジュピター》と、演奏される頻度が少ない《ブラハ》という、両方とも僕が大好きな曲を披露します。ショパンの「ピアノ協奏曲第2番」はピアノも難しいですが、指揮はもっと難しいです。

——牛田智大との共演について
V 日本で教育を受けながら、この若さで高いレベルに到達できるようにになったということは、日本音楽界がそれほど成熟してきているということなので、共演がとても楽しみです。

——ウィーン・カンマー・オーケストラの目指す音楽とは？
V 1946年創設のこのオーケストラは、全員が入魂の演奏をします。それを誇りに思っています。義務で弾いている人は1人もいません。また、オーケストラの傑出した特徴が出てくるまで、他の室内管との違いはズバリ、「ウィーン魂」です。その特徴には長短がありますが、長所は温かき、魂を与えられた音、音楽に帰依しているところです。ウィーン楽派の特別な楽器を使っていることもあって、高いレベルで求められている音を出せます。

——その短所とは？
V ワルツなどに見られるウィーン独特のリズムの揺れが、「全員がピツタリとは合っていない」と批評され、高評価を得られないところ。そのアバウトさを最大限に正確さに近づけて、いい塩梅で長所として発揮させるのが指揮者の腕の見せどころだと思います。

——ブッフマン(以下、B) 君が短所なんて言うから誤解を呼ぶのさ。その曖昧さがウィーンらしさにもなるのだから。ドイツのある有名なオーケストラで、あの揺れを教えるのに30分もかかった。それでも容易に学べることはないね。だからうちの団員は、オーストリア以外にハンガリー、ドイツ、カナダ、モルダヴィア、アメリカ、スイス、日本、韓国、カザフスタンの9つの国籍が混ざっているけれど、皆、ウィーンで勉強した団員だよ。

——ウィーン・カンマー・オーケストラの聴きどころは？
B 僕たちはいつも一緒に仕事をしているし、何か決定すべき事項があったら、いつもオーケストラに聞きます。複数の選択肢からオーケストラに選んでもらうと、結果的に一番よい決定になります。他の団員に敬意を表することによって、自分も敬意を払われるということが分かっています。そのような土壌での自由な楽想です。

——V 本団に団員同士の仲が非常によいです。例えば終演後も、仲良しグループに分かれて食事などに行くのが普通のオーケストラですが、ウィーン室内の場合、譜面台を共有している「隣人」と行きます。とても家族的で、普通は仕事としてのプロローブが終わって家庭に帰って行くのに、ウィーン室内では逆に、オーケストラのプロローブになると、家に帰って来たような気持ちになるようです。この団結感だけはいくら練習を重ねても得られない感覚です。そしてそんな団員の心が、舞台から感じられ、音楽に反映されているところ。ヴラダーの弾き振りもある今回のプログラムは、現在のウィーン・カンマー・オーケストラの勢いを感じさせてくれるだろう。